

ラグビーW杯 2003

その五 ranking

グローバル化の産物の一つにランキングがあります。ランキングと試合結果をすりあわせるのも興味ある見方でした。

アメリカは、野球・バスケット・アメフトの国ですが、ラグビーの歴史も結構古く、IRB ランキング 14 位 best fifteen に入るチームです。

少し前の IRB ランキングは日本が上でした。遠征試合では負けましたが、本番では勝って欲しいとおもっていました。さらに負け方がいけません。終盤の 2 トライは計算通り第 3 位を確定させ、将来へつなく意味のあるものです。IRB ランキングの上位 4 チームと、続くいわゆるベスト 8 とそれいかには格差があります。しかし、グループの第 3 位は決勝リーグに残れないが、実力を確定するものです。日本との差の大きさは点数だけのものではない。意識的に勝負の時期に点を取れるということは、実力の差が点差以上に大きいことを物語っていると言ってもいいでしょう。

一方、決勝リーグの 3 位決定戦は意味のないものと言わねばなりません。ゲームの内容は 3 位は 3 番目に強いチームと断定できないものでした。対戦相手が違い、メンバーを大幅に替えてやる場合もありますから、ベスト 4 が確定するだけでよいのです。

W 杯は順位を決めるだけのものではなく、ラグビーの普及向上を目的に、一堂に会することです。ラグビーの向上と普及を目的とする方策として、順位を決める方式で、勝ち残るために勝敗にこだわることを一方的に批判はできません。一昨年から昨年にかけてのイングランド強化をはかり、結果を出してきました。ランキング 1 位になりました。そして、イングランドは勝ちにいった。ラグビーの母国として、世界の盟主としての名誉にかけて着実に戦いました。それは negative rugby からの勝利ではないことは確かです。華やかさを求めるべきでないでしょう。ポイントでの忠実なタックル、強力 FW と卓越したキッカーがステレオタイプにじわじわと攻め、急峻な一発、SO の一の変化に防御は気を使った。ハーフの即刻直進は一番前にいる BK としての働き、キックも不定型に賢く、モールの多用もルールに沿った進め方です。

整理すると、ラグビーの将来性の一端が見えてくるようです。フィットネスの向上とプロ化とともに急速に進むでしょう。体格も筋肉もよくなりました。条件はあるにせよ交替できるようになったし、水の補給もされるし、血が出たら一時退場も可能です。

様々な面で昔と条件違うのに、一本調子な全力投球の感覚ではだめです。技術研究、記録の発達、映像の発達による分析など日進月歩です。BK の突破が一層容易でなくなり、強大 FW の激突傾向が高まるのが予想できます。そうなれば日本が永久に決勝リーグに残ることも無理だろうかという問いに対し答えは一つ、『handling』による徹底的継続によってレベルアップすることのみによって可能になるのです。

2004.01.11

西川 義行